

## 岩手医科大学歯学部歯科矯正学講座

歯科疾患発症の原因のほとんどは、個人の食行動と直接的、あるいは間接的に高い関連性がある。演者らはこのことに関して、食生態の変化が急速に進行しているトンガ王国を対象に、食行動と歯科疾患の両面から1983年以降3回調査を行ってきた。1983年は、成人、学童を、1988年は乳幼児を対象とし、1989年は、先進諸国に定住したトンガ人と比較するため、調査対象国にニュージーランドを加え、2カ国で調査を行った。今回の報告では小学校における診査結果の概要について行った。1989年の対象者数は小学校低学年が158名、高学年は134名の合計292名である。

結果：ニュージーランドと、トンガを、各疾患ごとに對比させてみると、齲蝕、不正咬合で両国の間に著しい差が認められた。とくに齲蝕有病者率は低学年ではニュージーランド77.6%に対して、トンガ離島は18.2%で、約60%の差があり、高学年においても64.2、35.8%と約30%の差となっていた。この傾向は齲蝕率（低学年：12.8、0.8%、高学年：7.4、3.3%）、1人平均未処置齲蝕歯数（低学年：3.0、0.2歯、高学年：2.0、0.8歯）でも現れていた。歯肉炎は、炎症が歯冠乳頭部に局限したものから辺縁歯肉まで進行しているものがほとんどで、低学年では66.0%、72.8%と、トンガのほうが多く、高学年では差は認められなかった。この年代の歯肉炎は、歯の汚れとの関連が高く、今後食行動の調査結果との照合が必要である。

不正咬合はニュージーランド（低学年：51.0、高学年：53.1%）より、トンガ離島（低学年：27.3、高学年：37.7%）が少なく、不正要因のうち不調和型は低学年は、38.8、27.3%で約10%、高学年では40.7、34.0%で約7%の差となっていた。以上のことからニュージーランドでは、都市型の歯科疾患のパターンを示していることが認められた。一方、トンガ離島の結果を1983年のものと比較すると、高学年では、歯肉炎の頻度、不正咬合の頻度、不調和型要因の頻度のいずれも増加の傾向を示しており、トンガ全体の近代化への影響が食生態へ及んでいることは明らかであると思われた。

## 演題4. 血液透析患者の歯科疾患の状況について

○松丸健三郎, 中林 良行\*, 近江 浩昭  
白戸 裕

岩手医科大学歯学部保存学第二講座  
仙北組合総合病院歯科\*

近年、血液透析患者の増加にともない、透析療法を無理なく長期にわたり良好に続けるために栄養補給をおこなう器官の一つとして口腔の役割があらためて重要視されてきている。我々は血液透析患者30名について、この栄養を間接的に妨げており、また、感染症の一因とも考えられている歯の疾患の状態と歯周疾患の罹患状態について調査した。

被験者は秋田県大曲市の仙北組合総合病院で最長4カ月～最長13年7カ月までにわたり透析をうけている26～77歳の男性18名、女性12名の計30名である。これら30名を便宜上、26～39、40～59、60～77歳の3群に分類した。歯の疾患については、健全歯、未処置歯、処置歯、喪失歯を調べ、年齢群ごとに男女をまとめて、一人平均現在歯数と一人平均喪失歯数を算出した。なお、算出にあたり、第三大臼歯は萌出や喪失の判定が困難なため除外した。一人平均現在歯数については、総数は、加齢的に減少し、60～77歳では、10.6本である。健全歯と未処置歯は加齢的に減少をしめし、健全歯は60～77歳では、26～39歳に比較して50%以上の減少をしめしている。処置歯は26～39歳で1.2本で40～59歳で0.5本である。一人平均喪失歯数では、40～59歳で5.6、26～39歳の13.7に比較して約1.5倍増加しており、一人の総歯数28本の約50%近くにたっていた。歯周疾患の罹患状態については、CPITNを用いて部分法で調査し、有病者率と一人平均有病分画数、および要治療度を算出した。どの年齢群でも100%に歯周組織に異常がみられ、浅いポケットは26～39歳を最高に加齢的に減少し、一方、深いポケットは、40～59歳からみられ、60～77歳ではかなり減少している。要治療度は各年齢群とも口腔清掃指導、歯石除去は必要であるが、複雑な治療は、40～59歳から急激に増加し、その後は減少している。20歳代後半からの歯周疾患に対する口腔保健活動の必要性が示唆された。

## 演題5. 3歳児齲蝕有病状況の地域格差と地域分析

○高橋 文恵, 長田 公子, 芳賀 芳人  
橋本 泰乃, 加藤 潤子, 緒方 出  
片山 剛

岩手医科大学歯学部口腔衛生学講座